

如く、此等の説の根底を爲せるものは

(一) 回鶻文字（回鶻碑に記さるゝ文字は含まず）とシリヤ文字、就中ネストル教徒の用ゐたる體とが、形の上に於て相似たること、

(二) シリヤ文字を用ゐたるネストル教徒が、回鶻碑文に見ゆるが如く、牟羽可汗の時代に回鶻に入り、而して其の教と共に、回鶻碑の一部に記さるゝ文字をも傳へたるものなるべし

とする點に在り、されば

(一) の理由は、若し回鶻人が所謂回鶻文字を使用したる徴證の存するより以前に行はれたる文字にして、ネストル教徒の用ゐたるシリヤ文字よりも一層回鶻文字に近きものゝ存する時は、自然に支へ難く

(二) の理由は、若し碑文に記さるゝ新宗教が、ネストル派の基督教に關説するものにあらずして他の宗教の回鶻に輸入されたることを記せるものなることが證明せらるゝ場合及び、碑文の文字が回鶻文字と稱すべきものに非ることが證明せらるゝ場合には、亦支持し難きに至るべきや論無き所なりとす。

偕て回鶻文字といふものは、シリヤ文字と類似せることは勿論なるも、然も前章に於て既に述べたるが如く、更に著しき類似をソグド文字との間に有するものにして、後代のソグド文字と、初期の回鶻文字との間には、其の何れなるかを定め難きものすら往々にして存在せり、今其の相互の類似を示す爲に、最後迄回鶻文字はエストランゲロ文字より發達したるものなりとの考を維持して屈せざりし Radloff 氏が、其の *Altürkische Studien IV* に載せたる、エストランゲロ、ソグド、及び回鶻三字體を對照せる前掲の表（篇首に掲げたるもの）を以てするを便なりとす。